

文芸研ブックレット 10

生きる力を育む国語科教育

講演 西郷 竹彦

二〇〇一年一月  
文芸研 編集

『生きる力とは』

講演 西郷 竹彦

二〇〇一年一月十二日 五所川原中央公民館

一、国語科でどう生きる力を育てるのか

最近の教育現場では、国語科教育などの学習というよりは、「総合学習をどうするか」とか、「生きる力を育てるにはどうしたらいいのか」とか、そちらの方の悩みが多いように思います。

私も研究者として、調べたり、各方面から情報を得たりして見ますと、「生きる力とは何なのか」また、「生きる力を育てるとは、どう育てるのか」実際の所探っても、探っても、皆目見えてこない。なので皆さんも知りたいと思いいこのテーマに魅力を感じて集まってこられたと思います。

肝心の文部省の出している文章を見ましても、読めば読むほど生きる力と言うのは、何を指しているのか具体的につかめません。

ですから、生きる力ということが具体的に示されるはずがありません。生きる力というのは、実は文芸研機関誌であります「文芸教育」という雑誌でとくに前から「生きる力」ということを特集しておりまして、私共に関しては今に始まったことではありません。

「生きる力」をこれから具体的に考えていきます。ですから、今日話すことも私共、文芸研が今まで生きる力をどう考えてきたかということをお話することとなります。

ただ、生きる力と言いますと、生活や人との関わり、全般にわたることになりますからここでは、「国語科でどう育てるのか」と言うことに絞って話していきたいと思いません。

それでは、本題に入りたいと思います。

「生きる力」を考えるとときにまずは、「生き方」ということが問題となります。

「生きる力」と言うときに、人間は何のために生きるのか。生きるとはどういうことなのか。ここをはっきりさせるといことが大事です。生きると言えば、犬でも、猫でも生きていくわけです。犬も猫もそれなりに自分たちが一生生きていく力を備えているわけです。しかし、人間が生きているというのは動物的に生きるという面もありますが、やはり、動物とは違う、まさに人間として生きる特殊なことがあります。生きるとは、つまりどういうことなのか、生きる意味をはっきりさせないといけません。

一番大事なところをあいまいにして、「生きる力」とか叫んで見てもどうにもならないことです。文部省の出している文章をみましてもなぜかそこが明確ではありません。

一番肝心なところがあいまいなのです。まずは、そこを抑える必要が有ります。

二 詩教材「生きる」生物として生きることの原点

それでは、教材を使って考えて生きましよう。

教科書教材になっています、谷川俊太郎さんの「生きる」という詩です。

6年生の下巻の終わりにのっている教材です。読みながら私の考えをのべていきたいと思えます。

生きる

谷川俊太郎

生きるということ

いま生きているということ

それはどういふことかという問を發している。それに対して作者自身が答えているといふことかという詩です。言わば自問自答の詩と言えます。人に対して生きるとはどういうことかだぞと教えている面もあるでしょうが、やはり、作者自身が生きるとはどういうことかといふことを自問自答しています。それはまず、へのどがかわくといふこと、「生きる」といふことと書かれると、のっけから大上段にかまえて難しいことからくるのかと思えば、書かれることが、なんとへのどがかわくといふこと、「元」の何かそのありふれたことから話が始まっている。へ木もれ陽がまぶしいといふこと「なるほど生きていくからこ喉が渇くんだなあ」と、死んだら喉も渇きようがありません。



骨が家族の元へ帰ってきます。そういうときも残された母や妻は、泣く自由がなかった物陰でひっそりと泣くということはある。人前で泣くことはできないのです。泣けるという自由がなかったのです。だから、泣きたいときに泣けるというのが本来は当たり前のことでありながら、それができなかつた。こういう時代。こういう社会があった。ということを感じ銘じていたのだと思います。笑いたいときに笑っちゃいけない。笑う自由がない。怒る自由がない。つまり、〈泣ける〉〈笑える〉〈怒れる〉といふのは、人間が人間として当然泣きたいときには泣きたい。その自由がない。自由といふのは、自分の精神の自由と社会が束縛する自由です。両面あります。自分自身が解放されてない。こういう状態が一つあります。もう一つは、社会、国家側から私たちを束縛している。泣きたいときに泣けない状態にしているものが存在している。怒れるときに怒れない。そういう拘束、縛る力が怖いわけです。自由といふのは、泣きたいときは泣くという自分の自由と泣きたいときに泣けるという外側からの自由に対する両方の意味を表しているということです。要するに犬猫は、笑うといふことはありませんが怒ったら怒りますし、喜んだらしゃべりを振るといふように表現しますから、人間より或る意味では自由です。率直に自由に怒りや喜びを表します。人間だけが人前では、泣いちゃいけないとか、人前で笑っちゃいけないとか、いろいろな拘束といひますか、自分の心を縛っているわけです。

#### 四 すべてが関わりあっていること

自由を奪った状態、人間が人間らしく生きていないということになります。次にいきますと、〈生きているということ いま生きているということ いま遠くで犬が吠えるということ〉このことが今なぜ、生きているということと関係あるのでしょうか。関係ないということはこの世の中ではありえませんが、この世の中の全ては、様々な諸関係の中に生きています。ですから、遠くで犬が吠えるといふことは、無関係と言えど確かに無関係ですが、つくづく考えて見ますと、回り回ってそこには何らかの関係があるはずで、全ての人は、全てのものごとと関係を切り結んで、その網の目を生きていくといふことなのです。ですから、犬が吠えるといふ、取るに足らないことも、どこかで私に結び付いているといふことと関わりあっているわけです。この地球が回っていることも、犬と対比させていることが見事です。要するに小は近くの犬から、大は地球から、あるいは宇宙からといったような、すべてがかかわりあっているといふことなのです。もちろん、どこかで産声があること、どこかで兵士が傷つく、それらがすべて私たちに関わっているといふことなのです。例えば、中近東では、戦火の中で人々が飢えに苦しむ血を流しています。ですから、私たちは、今、テレビや新聞などで報道として知るだけで、どっかのこととして置きます。考えて見ますと、それら全部、密接、不可分に関わっているのです。つまり我々が生きていくといふことは、そういうこととかわりあいてその世界で生きていくといふことを認識する必要があるのです。それが世界といふものであり、人間といふものなのです。人間といふのは世界の中で生きています。その世界は網の目のように、全てのものでかみ混んでいきます。そういう中の一人として生きていくこと、鳥がはばたくといふこと、これは、平凡なことです。鳥がはばたけないといふこと、鳥がはばたくといふこと、これは、平凡なことです。鳥が鳥として羽ばたくといふことは鳥なんだといふことであり、自由に大空をかけるといふことなんです。〈海はとどろく〉海はよせてはかえす。潮流となつて太平洋をぐるぐる回っています。海はそういうものなんだといふことです。〈かたつむりははうといふこと〉はえなくなつたら、それはかたつむりの死です。同じように今歩いていることはきわめて平凡なことです。平凡な当たり前のことですから、それなしには、それぞれの生きていくことがありえないわけです。〈人は人を愛するといふこと〉これも平凡な、しかし、大事なことなのです。人が人を愛する。親が子を愛する。男が女を愛する隣人を愛する。様々な愛の姿がありますけど、とにかく人を愛するといふことは、人間の平凡な、しかし、一番大事な真実だとそういうことを言っているのです。〈あなたの手をぬくみ〉そこにお互いの命のぬくみを感じ合う、お互いの命を支え合う、それが人間が生きるということと、つまり或る意味で言いますと、わかりきったことを書いています。当然なこと、当たり前なことが人間が生きるということの肝心なことな

のです。人間が人間として生きるといふことは難しいといふことではありません。ごく平凡なことであって、このことこそ確認しておく必要があると思ひます。

### 五「われは草なり」 伸びるときに伸びるといふ生き方

高見 順さんの詩です。

高見 順さんという人は、最後の文士と言われた人です。

若いころはあまり書いていないのですけれど、晩年、散文詩を書いていました。それらの詩は、人生句と言いますか、人間の生き方を示唆するような詩がほとんどでした。草と言えばそこらへんにある雑草です。取るに足らぬ名も無きと言いますが、そう言った「草がわれは草なり」と、なんかこう格調高く言っているところがおもしろいところなんですけど、「おれは草」だと言っているのではなく、「われは草」だと格調高く言っていますけど、ところが歌っている内容というのは、これまた平凡なことです。

「われは草なり 伸びんとす」草と言えば伸びるです。草が伸びると言えば、鳥がはばたくと同じで、平凡な草の本質とされています。草が伸びるとき 伸びんとす」これもまた、あたりまえなことです。伸びられぬ日は 伸びぬなり」なんかこう人をばかにしたような言い方です。もちろん伸びられぬ日は 伸びぬなり」のは当たり前のこととをいっているようなものです。ですから「伸びられる日は 伸びぬなり」こんな当たり前前なことをわざわざ言うまでもないことを作者は文語調で格調高く語っています。そうすると、まてよ私たちは確かに伸びられる時は、伸びるし、伸びられないときは伸びないのだと、これはごく当たり前の事実ですけど、でも私たちがどっかまよいをもっています。伸びられないと分かっていながら、承知しながら、やっぱりなんか伸びたくてあくせくしたり、めいったり、するのではないのでしょうか。生きるということはず、伸びられる時は、伸びるのだと。伸びられないときは、伸びないのだと。そういうごく平凡な事実をまずは、確認して、そこからスタートしようとするということ

### 六 価値ある生き方

「われは草なり 緑なり」これは当たり前なことです。草が緑ということとは、言わなくてもわかることです。《全身すべて 緑なり 毎年かわらず 緑なり》確かにそういう通りです。ところがそこで、《緑のおのれに あきぬなり》とあります。ここがちよっとおやっと思わせませす。人間というのはどこかあきっぱいところがありまして、相も変わらなうということになるという加減にしたい、なんかこう変わったことをしたい。あるいはなんかこう飽きたとか、退屈だと、かとういうことになりかねません。でも、この語り手の草は、緑であることに飽きないということが、なぜ、あきないんだらうと思わせませす。そして、次を読んでいきますと、「われは草なり 緑なり 緑の深きを願うなり」ここは、素晴らしいです。なぜ、緑であることに、年がら年中、緑であることに飽きないのか。

日ごと、月ごとに自分の緑が深くなっていく。それを願う。願っていることであきないと言っているわけです。考えて見ますと、私たちは、自分の生まれたいのはどうしようもないことです。女の人が女に生まれたという事は、いかにしがたいことです。女に生まれたことにあきた、女であることに嫌気がさした、男に生まれたいよかったです。例えば悔やむ気持ちも分かりますが、男社会の中で差別を結構うけていることを身をもって体験すればするほど、女であることはつまらない、もう嫌だ。男であつたらいいと思う訳です。しかし、それは所詮、もう言うて見ても始まらないことで、いまさら女であることをやめる訳にはいきません。そうすると逆に女であることを生かす。女であれば、緑と言うより、紅と言った方がいいかも知れません。紅の花にたとえれば、ますます紅の深さを願って生きるということなんです。

なんかいいさか説教してみました。しかし、これは、私が説教している訳ですから、あたしがそれを代弁して言っているだけ、偉そうなことをいうなと聞いて下さい。草は、緑の深さを願う。紅は、紅の深さを願う。そこに生きがいを感じるということでは人から見ても美しいと感じる訳です。ですから、《ああ 生きる日の 美しき》とありますが、そういうふう生きるということは、誰から見てもある美しさとしてあるの



ません。途中は抜きにして行った先で何かすることが目的になつてしまつています。

でも昔の人の旅というのは、休養ということもありますが、一般的な観光と言いますと方々を見ながら歩く観光、行く先々を味わいながら歩く観光、プロセスを味わう観光そこに人生の足取りを刻みながら、そして、津軽や奈良にいつか死んで墓場に行く目的で途中は手段という割り切り方があると思ひます。確かに考えて見ますと、人生の終着駅は、墓場です。でも、墓場へ行くのが目的でしょうか。いつか死んで墓場に行くことが目的ということはないはずですが、しかし、僕たちはどこかで似たような錯覚をしてるのではないのでしょうか。二階へ行くことだけが目的で、途中の階段は、手段に過ぎない。できれば、途中を一気に省いて、吹っ飛ばして二階につければいいのだと考える。これを人生と重ねて考えて見ると、人生というのは自分の目的のための過程でありただの通過点にしか過ぎない。というような考えをもつたら非常に奇妙な考えになるわけです。漫画風に言うとなんか最終地点は墓場です。墓場へ行く、死が目的、そこへ行くにはそこへ進む道は、ただのプロセスにしか過ぎない。こう言うふうになつてしまふとなんかおかしくすよね。やっぱりどう考えてもおかしいですよね。一步一步事態が生きる目的であつて、と言うふうになつていくと、そのことを示唆している詩ではないかと考え、僕は結論づけれます。普通に読むと子供はこんなことを楽しんでるんだ、笑つて通り過ぎて行く詩ですけど、ちょっと立ち止まつて、待てよと、この詩を人生、自分の生き方ということに当てはめて読んで見るとどうでしょう。「そうか。」一步一步事態をいい加減にしないで二階に上がるのにもただ上がるのではなくて、一步一步を踏み締めて、一步一步をもそこに生活の喜びを踏み締めて、そこに何かを見いだした方が人生というものが充実するのではないかと思ひます。人生とは一步一步をどう生きるかということが人生の充実につながつて来ます。どっかに行つてから何かが始まるのではなくて、今の生活は腰掛けなのだ、私の目的は違ふところにあるのだと、それをするまでは端なる腰掛け生活なのだ、そして、腰掛けだからいい加減に過ごして、いずれやりたい仕事、やりたいことについてなら全力を上げてやろうと言う考え方をする人も結構います。今の私の生活は余儀なく、仕方なくして、本当の私の人生じゃない、私の人生は向こうにある。だが今はそこには行けないはず行つたら、頑張るんだというのじゃ、そこへ行くまでの間は余計な、無駄な回り道とその回り道とは嫌々行くとそういう人も結構います。私のやりたいことはずっと向こうにある。そこまでは腰掛け生活そこへ行くまでは、腰掛け生活。それでも行き着けばいいのですけれど、なかなかどっかいそはいいかない。目的は、さらに遠ざかつていく、また、歩いて行くと、また遠ざかつて行く。その結果人生を回り道で過ごす人もいます。道を歩いて行きますと通行止めにあつてそこから先には行けない、そこで余儀なく回り道をします。しかし、回り道の中に何かを発見するとか、楽しむとかでまた変わつて来ます。どうせ回り道をするのなら、ぐずぐずしながら回り道をしなさいで、その回り道の中に何かを発見しながら、味わいながら行くとどうでしょう。そうすると、それも私の人生になるのですから。

回り道をしちゃ行けないとか行つていゝるのではありません。例え回り道をしたとしても回り道を回り道と見るか、予期せぬ人生が始まつたとみて考え直すことを「かいだん」という詩から考えさせられます。大変幼い子の発想であります、人生というもの歩き方ということを教わる気がします。

#### 四 けしゴム 価値の想像ということ

詩人というのは、まどみちおさんというのは、どう言うものを詩として歌つていゝるかという、子供の生活で言う、えんぴつだとか、消しゴム。人間の体で言う、涙とか、目とかおしつことか、取るに足らないものを題材に取り上げています。生き物で言う、うとノミとかシラミとかミミズとかです。犬とか猫とかありふれたもの。子供が知つていゝるもの、ライオンとか、シマウマとかごく一般的なものが多く、カモノハシとか変わったものはありません。要するに、そんなところのありふれたものを題材にしていゝます。

けしゴムだつて、単なるけしゴムにしか考えません。

しかし、まどさんは詩人として充実した人生を生きていゝます。というの、けしゴムひとつ見ても、けしゴムとかじゃなくて、けしゴムの中に生きる意味を発見してゐるんです。

読んで見ましよう。

「自分が書きがちがえたのでもないが、いそいとけす」  
「いそいと」  
「いそいと」といふと、なんかけしゴムが「いそいと」というと、なんか変じゃありませんか。「いそいと」といふと、なんだか楽しく、励んでいる様子でしょう。「自分が書いたウソでもないが」  
「みんなそうです。自分が書いた間違ってない、自分が書いたウソでもないそれを「せつせつ」と、じゃない「いそいと」と、「せつせつ」と違って喜び勇んでという思いが伝わる感じがします。それでは、なんで喜び勇んでいそいと消しているんでしょう。しかもですよ、「結局、自分がちびびって、消えて、なくなってしまう」その人生をけしゴムはなくなるまでいそいと消している、人生終わるまでいそいと消しているわけですね。いそいと消しているわけですね。なんで消しているんでしょう。「正しいと思っただけを、楽しいと思っただけを」自分で判断しなくてはいけません。「美しいと、思ったことだけを、消してしまおう。こういう生き方なんです。けしゴムでも立派な人生を生きていると思います。とても私共はここのまでの人生の生き方はできないと思います。なんか、人のやったことの後始末、尻拭いをやらされているような立場ですね。私たちが価値を見いだすと、想像と言ふのは、ある価値を見いだすことです。価値の想像というものは、生きがいのあることを見いだすことです。私たちが、生まれた以上何かを生み出して、何かを見いだして、そして生きて生きたいというそれが生きがい、生きる意味につながっていくわけです。そういうものを認識したことから生きる意味も育つのだと思います。普通私たちは、想像というのを作ることだと考えます。破壊というのは、作るということと違う。つまり鉛筆で文章を書く、これは想像だと、しかし、けしゴムで消す。これをどうしても想像とは、考えません。しかし、世の中にはそういう役割も必要とするわけです。そういうことでこの世の中は成立するわけです。けしゴムで間違いやら、汚れは消す。という役割を自らもつ人間という存在を表しているわけです。そうすると書くということは、想像。消すということは想像じゃないと思っただけ、消すことかあると思います。それは、積極的な書くこととどどこかで割り切っていると思えます。果たしてそうかというところが、みちおさんの問題提起なのです。この世の中には、どうしても書き間違えたり、汚してしまったりすることがある。それが、そのまま残っていたのじゃ、汚れに充ちた世界になってしまおう。そういう役割、そういう人物と言ふものが、必要なんだということです。そして、「いそいと」と生きがいとして生きている人間がいるのだということであり、そんな自分になってみようじゃないかと言ふことです。

#### 八 生きる価値とは

そうすると、けしゴムという詩でこういう考え方・見方をすると、こういう人間の生きる方人間観を育てる。それがつまりは、生き方になり、生きる力にもなるのです。生きる力というのはそこに生きがいを感じてこそ生まれるのです。もういやいやしていることに力があるが、力があるが有りません。やはり力というものは、自分のすることによって、意味があると認識したときに発揮されるのです。例えば、子供の不幸に遭ったときに、親は、何とか乗り越えさせて上げようと、慢心の力を振り絞ります。そのことは、やりがいがあり価値があり、だから力になるわけです。力というのは、そうやって生まれてくるものなのです。

つまり、三つ詩を扱いましたが、詩を使って授業をするというのは、言葉や表現の学習ということもありますが、詩を通して人間の生き方について学ぶということもあるわけですね。つまりどのような生き方が、生きがいがあり、幸せなのか認識することが基本なのです。それがなくして生きてても、力もあつたものじゃありません。例えば、泳ぐ力を育てる。ことを例えに考えて見てください。泳ぐ力を育てる時には、泳ぐということ



はどういうことなのか、次に泳ぎ方を学ぶということだと思ひます。足はどう動かすか、手をどう動かすのか、そのわけを学ばせるわけです。まずは、頭でわからせるわけです。なぜ、そういうふうには手足を動かすのかという原理をわかるわけです。わけもわからず手足を動かしたのでは、意味がないのですから、やっぱりまず、わけをわかりながら手足の動かし方、泳ぎ方を学ぶ。そして、実際、その泳ぎ方をやってみる。最初は泳げないでアップアップしてしまふでしょう。しかし、やっていると自然と泳げるようになります。その、泳げるようになったことを私たちは泳ぐ力がついたというわけです。生きる力というのは、まず、生きる力というのはどういふことなのかまず学ぶ。 どういうふうに住めるのか、なぜ、そのような生き方をするのか人にどんな意味があるのか。そのことを実際に学んで、そのことを実際の自分の生活の中へ取り入れ実現するということによつて力になるわけです。なんか生きる力というのと抽象的なことがどこかにあるのではなくて、泳ぐ力というのもどこかにあるのではなくて、泳げたときについたというのです。

文芸研では、どのように国語の授業を考えているかと言ひますと、こういう優れた物語なら物語り、詩なら詩を使って、そして、表現とか語句の学習ももちろんやるわけですが、そこで終わるわけではなく、読解で終わるわけではなくて、そこを突き抜けて人間の見方を学ぶ。それはつまり人間観・世界観を学ぶ、それを実際の生活の中で、学級の中で生かしていく時に發揮していくことになるのです。生きる力ということが前にあるのではなくて、ものの見方・考え方をちゃんと育てようとするのが生き方を学ばせることになるのと同時に生きる力になるということなのです。急がば回れ出、生きる力をどう育てるかというのをのっけからやるのではなく、生き方をきちんと学ばせていく、それが結果として生きる力を育てることになるのです。

生きる力とは、犬猫として生きるのではなく、人間が人間として生きる力のことです。そのためには、人間とはなんぞやという意味が分かることが大切です。教材で、学ばせていくことが大切です。

##### 五 「おと」 ひびきあう世界

工藤直子さんの詩です。「おと」いけしずこさんは、この詩の作者ということになります。これは、「のはらうた」の中で、野原の住民の代弁をして書いているのです。その「のはらうた」の中の一つです。語り手が池の中の語り手であつて、自分のことを語っているという詩です。へぼちゃん ぼちゃん ちゅび じゃぶ ざぶん ぼしゃ いろいろな音を出しているわけです。そして、最後にへどぼん・・・となるわけです。へどぼん・・・というの、その他まだまだたくさんあるということですが、わたしは いろいろな おとがする」とたわいのない詩です。こんな詩を教材にしてほしい何を教えるのだろうか。というように考えます。これは、やっぱり素晴らしい詩です。詩人というのは自分のまわりのとるに足らないものを題材にして書きます。題材は、草であつたり石ころであつたり、身近な取るに足らないものを取上ながら、実は、主題は、テーマは、人間のことなのです。皆さんは、水のことを書いていますか、実は、確かに題材は水のことですけれど、ここから私たちが学ばなければいけないことは、人間とは何ぞやということなのです。

そこで、この詩から何を学ばなければいけないのかということをお話して見たいと思ひます。教師は子供を教え育てています。そうして、どうにも何かうまいかない。なげえてる。この子を何とかしたい。子供たちにこんなことをわからせたい。こんなことをしたらこのように答えて欲しい。それが、なかなかうまくいかななくて悩んでいる。事だと思ひます。なかなか子供が思うようにいかない、育たないということが考えられると思ひます。そういうときにこの詩を読んでいただきたく思ひます。そんなこと言つたつてどこでこの詩が答えているのか考えます。実はね。へどぼん」という音があります。これを普通皆さんは、擬声語というようにいいます。が、私はそれを声喩というよきには、こう言うのは声喩と言ひますと教えないといけません。さて、そのへどぼん」という言葉ですがあるいは表現と言ひてもいいです。さて、へどぼん」は、何を表現しているのでしょうか。おおにして、十人が十人水の音というでしょう。へどぼん」は、何の音でしよう。というときみなさんも全員、水の音というでしょう。水の音という答えは、十点満点中三点です。やはりそれは正しくないので。水の音という答えは、

ちょっと聞きますけど水というのは、勝手に音を出します。出しませぬ。じゃ、〈どぼん〉と言う音は何かというと、水と例えば、石としておきます。その石を落とすと〈どぼん〉と音がします。水と石の触れ合いといいますか、響き合いといいますか、この関係を相関関係といいます。

石が水の中に落ち込んだと言う関係です。水から言うと、石が落ちてきたという感じ。石から言うと水に落ちたという感じ。この関係です。これが〈どぼん〉なのですから、石がこれだけではこの答えは正解ではないのです。まだ、半分。

●机を支持棒でたたく

これは、何の音ですか。

支持棒ですか。

机ですか。

支持棒が、机をたたいて出る音です。

机と、支持棒との相関関係です。

それがこの音なのです。

ちょっと紙に、この音を書いて下さい。

●机を支持棒でたたく

書いたのを話してもら

その一列の方、読んで下さい。

〈ぼん〉

〈ぼしっ〉

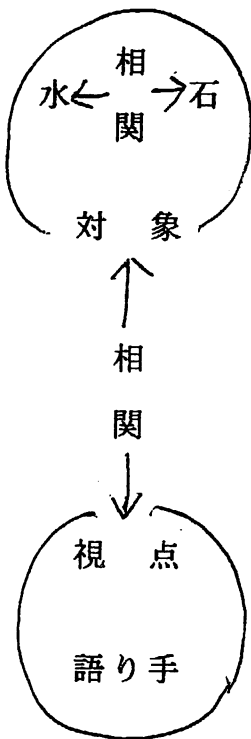
〈ぼん〉

三人三様といいますが、どれが本当なのでしょう。

なんで、〈ぼしっ〉となり、〈ぼん〉となり、〈ぼしっ〉となるのでしょうか。

それはですね、これを対象と言いますが、視点とも言いますが、今語ってくれた人の視点です。視点と対象の相関関係。だれが何をどう見たか、感じたかということが〈ぼしっ〉であり、〈ぼん〉なのです。誰がというのは、語り手が変わればということ。石が水に落ちた音を語り手が、〈どぼん〉と感じ、〈どぼん〉と言ったということ。

〈どぼん〉と言うのは単に水と石という関係だけじゃなくて、誰がどう見てどう感じて言っているかということなんです。僕は、表現というのには必ず誰が何を見てどう感じたかと言うことだと思ふんです。さて、そこでですね。これは、表現の問題ですが、ここで授業するということは例えばそういうことも教えないといけません。言葉というものは、どういうものか。表現というものは、どういうものかということ。言葉や表現というものは、何かと何かの関係において、誰がどう見たかということが表現されているということです。これは、言葉というものの本質ですから、押しや表現を押しやえたい授業とはまったくことなるわけです。現在の国語教育は、全部そういう間違ったことをおこなっているわけです。この三者の関係をしっかり押さえることです。



さてここからが問題です。言葉の本質だけを教えるのでなくて、同時に人間について教えることが大切です。じゃ、この詩でどういうことを考えるかということ。

そうすると水というものは、どぼんと音を立てたいと思いません。やっぱり大きい石を力強く投げたくてはいけません。そうです。大きな石を力強く投げたら必ずどぼんとかえってきますよ。小さな豆粒ほどのものを投げてどぼんと音がしないなんて笑われますよ。それはそうですよ。豆粒みたいなものを投げてどぼんと音がしないなんて、怒ったり、悔やんだりして滑稽ですよ。

そうすると水というものはですね、もしですよ、へどぼん」と言う音を立てたいと思いましたが、やっぱり大きい石を力強く投げなくてはいけません。

大きな石を力強く投げたら必ずへどぼん」とかえってきますよね。小さな豆粒ほどのものをへどぼん」と音がしないなんていったら笑われます。

豆粒みたいなのを投げてへどぼん」と音がしないなんて、怒ったり、悔やんだりしたって滑稽です。しかし、私から皆さんを見ると教師というのは、そういうことをしていると思うのです。授業して子供がちゃんと反応しない、意図したとおり反応してくれない。

それはそうです。

反応しないようなことをしているからです。わかりますか。水でさえ、大きな音をたてたかったら大きな石をへばあん」と投げないといけません。

へぼちゃん」という音をたてたかったら小さな石を投げ込めばいいのです。

必ずこっちをむきます。

ですから教師の意図ですが、どう言うふうにも反応してもらいたいか、どう言うふうにも答えてもらえたいかががあるわけですね。そうしたら、しかるべき教材をしかるべき形で授業すると必ずへどぼん」というのです。この信念をもつべきです。私は実際にもつていますね。いろいろ授業をして見て、そういうふうにもつて悪いのは、子供じゃなくてこっちの教材が適切でない。こっちの指導の仕方が適切でない。必ずそういう原因があり、子供は水ですから、今日は、へちよこん」と音を出させたいと思えば、そういう教材をもってきて、そういう風に投げ込む。そうすれば必ずへちよこん」と音がする。へちよこん」と言わなかったら子供が悪いのではなくて、教材があわなかったのです。または、授業の仕方にも原因があるのです。このように考えることが教師の鏡でもあるのです。ましてや、水でさえこうですから、子供は無限の可能性をもっています。皆さん教師は、子供は無限の可能性をもっていると信じているけど、信じていない。無限の可能性というより、これぼっちの可能性しかないと思ってしまう。そうじゃないのです。水でさえここに書いてあるようにたくさんの音を立てるのです。「・・・」とあって、書き切れないほどまだたくさんあるのです。まして子供は可能性をもっているということは、大きな石を投げ込めばどぼん。小さな石を投げ込めばへちよぼん」。さまざまに音を出す可能性をもっているのです。それを信じてください。私は、もう八十になりましたが、この年で、駆け出しから始まって、授業をさせてもらって、もう授業の数だけでも三千回を越えています。この経験からこっちのやりかた一つで、いろんな音を出す。こっちの思った音を出せたいのであれば、しかるべき教材でしかるべき指導をすればいいというわけです。もうそれにつきまします。もう簡単なことです。簡単なことだと言っても、じゃどの教材でやるかとなると簡単なわけではないのです。また、たまたまこの詩は水ですけど木だったらまた違う訳です。子供も十人十色です。ですから子の子は木だとか、実態にあわせることも大切です。まあ、この音という詩は、教師がどのように音を出させるの、子供たちも先生、言い音を出させてくださいと言っているのです。

水の方も、子供も音を出したいわけですからそういうふうにしてやってください。

## 六、「かぼちやのつるが」

次ぎは、かぼちやのつるがです。

かぼちやのつるがというのは題材です。しかし、これは人間のことを歌っているのです。どんな詩でも題材は、かぼちやであったり、動物であったり、水であったりする訳です。テーマは、いつでも人間のことで、主題と言うものを区別しないといけません。テーマのことです。テーマは、いつでも人間のことで、人間と人間が生きている世界のことです。題材は、そんなじよそこのなんでもないようなことがいっぱいいてきます。今水でした。今度はかぼちやのつるがです。かぼちやのつるがのことを授業して何になるのか。というように思わないでください。水の詩で実は人間というものはこういうものだよ、水だけじゃないよと、教えるといいたいです。教材というものは、子供に教えるだけじゃなく、教師が先に教師として何を学ぶかということや、何を考へることが大切で、音と言ふ詩は、人間というものはすべてこういうものだということや、何を考へて教えているわけです。音と言ふ詩から、

授業とはこういうものだ、子供とはこういうものだと学ぶことが大切なのです。教材というのは、子供に教えるだけあるのではなくて、まずは、教師が学ぶことが大切なのです。

かぼちゃのつるがという詩ですが、句読点がありません。だいたい詩には句読点がありません。句読点がある場合にはわざわざつけたと思ってください。これは句読点がありません。ずっと読んで、「最後の空をつかもうとしている」ここに○がつきます。ことなくただひたむきに成長しつづけるかぼちゃのつるのイメージを詩の形にしたわけです。一段生え上がることで太陽の光を浴びる、それで葉を広げて光合成をする。光合成をしてさらに根をはり、茎をのぼし、つるをのぼし、さらに下をほう、一段上がるということは、さらに太陽の光を多く浴びて、さらに体を太らせ、高くはい上がる。ここに成長のドラマがあるわけです。つまり、生物というのは自ら生きる条件をつくり、その条件によって一段上昇すること、これが生命というもののドラマです。生物というのは成長するために光合成が必要です。そのために「はい上がり、葉を広げて太陽の光を多く浴びないといけない」という条件が必要です。自ら、その条件をつくっているわけです。与えられた条件じゃなくて、自ら太陽の光を吸収するために、さらにはい上がり、葉を広げ、さらに一段上にあがるということなのです。そこによりよい条件がつくられていくわけです。自らがより良い条件をつくるということが生物のドラマなのです。さて、ところが限界があるのです。ちょっと高くなりたいたいと言っても、一人ではできないわけです、そこで人が竹を立ててあげるわけです。たまたま竹があったのじゃなくて、人が竹をたててやる、たけかけてやる、ことで屋根まではい上がることになるのです。しかし、皆さん考えて見てください。かぼちゃというのは畑につくるわけです。作物として、屋根の上にはおぼせることも昔はよくやったのです。クレーンがあるわけじゃなくて、夏、部屋の中が暑くて大変です。かぼちゃというのは広い葉をカーアと広げますから、屋根にかぼちゃをはわせて、光を吸収してくれる、屋根の下、つまり人の住んでいる部屋はそれだけ涼しくなる、日よけということを考え、かぼちゃを屋根にはわせることを昔はよくやっていたのです。そういうかぼちゃなのです。いわゆる畑のかぼちゃじゃないのです。竹をしっかりとぎって書いてある所読んでここには書いていないけれど、人がそえてやった竹なんだな、屋根にははわせて夏の暑さを防ぐために、はわせていかぼちゃは、人間が竹をそえてやったわけです。そのことで竹はい上がりました。つまり、自力だけでは人間というものは、上にはい上がることはできない。自分の力ではい上がる、葉を広げてということも大切ですが、自力では、限界がある。そこでやはり他者の力をかりることが大切なのです。子供の場合、自力というよりは、一、二年で足し算や掛け算を学ぶ、それが条件となって、より多くの知識をえる条件がそろいます。ひろい知識をえた、そのことがさらに条件となって、多くの知識を獲得する力になるのです。自ら自力でやっていくわけですが、自力でやっている限りでは、限界があるのです。親、教師というものの他者の力が必要なのです。また、お父さん、お母さん、兄弟、友達、先生と言う人が竹をそえてやる、それにすがって、はい上がって行こう。天まで伸びて空をもつかもうと成長していくことになるのです。自分が生きるといふことは、自分で成長しようとする条件をつくる、そして、はいあがっていくのだ。しかし、同時にお父さん、お母さん、先生の力をかりてさらに一段、上にはいあがると言う姿なのです。それが、より良く生きるといふ姿なのです。自分の力で生きていくのだけれど、自分の力だけでは限界がある、そこに友達やら、親やらの力添えが必要であり、人間という者は、そのように育っていくのだ。という意識がここから学びとれたらいいです。そうすれば、これは「かぼちゃのつる」のことをいっています。作者はそのことではなくて、人間が生きていく姿を表しているのです。

そのようにかんがえるとかぼちゃのつるに人間の姿を重ね合わせてよむことが生きる姿を生み出すことになるのです。生きる力というのは、人の力をかりて生きて行くことなんだということがわかるわけです。そういうのを相関的見方というのです。それがなせ相関的というのかというと、人間の方はかぼちゃに竹を添えてやって、竹の成長を一段と高いところへ助けてやって、かわりにかぼちゃのつるから日陰を作ってもらうことになる。お互いにもちつもたれつる関係これを相関関係という。人間というのは他者と相

関関係をもって生きていくということ。人間は、独りぼっちで生きていくのではない。相関というのは響きあう関係です。持ちつ持たれつ。関係。連れ合つて変わるというようにいっていいわけ。ようするに、人間がかぼちゃの成長を助けてやって、一段と高くはい上がるようにしてやって、逆に言う、屋根に一杯葉を広げ、見事な成長ぶりを満喫するわけです。それは、人間の助け竹が、もたらしているわけです。持ちつ持たれつなわけ。

ある意味で共生とも言います。つまり、人間というものは一人で生きられるものじゃない。他者と共に、相伴つて、あい連れ合つて、相関的に生きていくということが人間の生き方ということなのです。生きる力ということを考えるときただ自力で生きていくなんて思つてはいけません。やっぱり、他者の力をかりながら、と同時に自分も他者に力を与えながら生きていくんだということが、例えば、「かぼちゃのつるが」の詩から読み取れたら素晴らしいことだと思います。おそらく作者の原田直友さんもそのことを願つて子のような詩を書いているのだと思います。

#### 十 「鉄棒」 詩の授業でもの見方・考え方

この詩は、逆上がりかなんかやつて、それが成功した達成感を書いた詩だと読んでもかまいませんが、それだけで終わつたのじゃもつたいたくないです。この詩で、詩の授業というのには、詩でわからせる、この会のテーマで言いますと、詩で生きる力をわからせるということ。あわせてそのことが詩がわかつたということにもなるのです。いわゆる世間で言う読解指導というのは詩をわからせる授業でしょ。詩がわかつたということ。で終わつてしまふそれでは、もつたいたくない。詩をわからせるということ。目的にしないで、教材で人間とはなんぞや、生きるとはどう言うことなのか、ものの見方・考え方の方を学ぶ。あわせてそのことは同時に詩をわかることにもなるのです。詩で生きる力をわからせるということ。あわせてそのことは、ちゃんと詩がどう言う詩であるのかということ。詩が深くわかつたということにもなるのです。それから詩の授業というのは、詩がわかるということ。同時に、詩で力を育てるといふことが統一されたものなのです。読解を越える授業とはそういうことなのです。僕が、いふのは、そういうことなのです。

鉄棒という詩ですが、普通でしたら、僕が鉄棒に飛びつくといふところなのですが、僕が地平線に飛びつくとあります。僕は、世界にぶら下がったとあります。ここで詩について説明しながら、人間が生きていくことはどういふことなのか解つてもらいたいと思います。まず、地平線といふのは比喩、たとえといふことです。鉄棒に飛びつくといふことを地平線といふたとえをもつてきて、地平線に飛びつくといふと表現している。しかし、このたとえは私たちが日常使う私たちのたとえとは目的、性格が違います。そのことをこれから話していきます。

僕が鉄棒に飛びつくと言つた場合と、僕が地平線に飛びつくと言つた場合と、どう違うかと考えると、どっちが大きいですか。もちろん、地平線が巨大ですが、鉄棒というのは身近にあるただ鉄ですが、地平線といふとはなるかなるものですよ。そうすると、鉄棒が地平線になる、地平線が世界になる、いわば、イメージが変化、発展しています。大きくなつていきます。そうすると、僕と鉄棒といふのは相関関係がある。響きあう関係。鉄棒に飛びつく僕と。地平線にとびつく僕とどっちが大きなイメージに感じられますか。実物は変わりませんが、イメージですよ。鉄棒に飛びつく僕のイメージ、人物像は、地平線にとびつく方のイメージがぐっと一回り大きく感じられることがわかります。さらに、世界にぶら下がるとなると鉄棒のイメージがさらに飛躍してひとまわり大きくなる。それとつれあつて、相関的に僕のイメージが大きくなる。さらに、世界が一回転して僕が上になる。これは、もう、ジャイアント、巨人ですね。というところは、この詩を詩として読むといふことは、つまりこのように読んで欲しいわけ。単なる、一メートルの人間が世界にとびつく、それがやがて、鉄棒の上に乗つたといふ様子を、ちょっとおおげさに書いてみると読むか、そういう読み方も悪くないけど、僕が鉄棒を地平線に変える。僕が世界を変える。ということが、僕自身をも小さな僕から、日常的な僕から、等身大の僕から大きな僕。やがて巨人の僕。というように僕自身が大きく飛躍していくといふように読んで欲しいです。

これは、そういう読み方をこの詩が要求しているわけ。詩というのはそのように読み方をするわけです。そういうように作者は書いてあるわけ。単なるこれをたとえとしてとらえてはいけません。様子をたとえてあるだけとみては行けません。比喩と

けです。という方法によって、現実を越える。現実をふまえ、現実を越える世界をつくっているわけです。

地平線があるから飛びついでたのではなくて、僕が鉄棒を地平線に変えることによって、僕が僕とものとの関係に飛びつき、僕自身も地平線にとびついたことで大きくなる。これが僕とものとの関係なわけです。これはどういうことかとすると、人間はどうやって自分を育てるかというのと、木なら木を削って、何かのものを作るとします。つまり、僕が木なら木をある価値のある、一つの彫刻を美術品を作ったとします。これは、作ることで私を育てているのです。たとえば、美的な私の能力を育てているわけです。つまり何かを作るということは、逆に自分を育てていることなのです。こういう関係があるのです。人間が何かをつくるというものは、何かを変える、ものであるうと、価値のあるものをつくる。そのつくる、変えるという私の行動。行動がわたし自身を大きく変える、育てているわけです。これは、あなたたちが子供たちに作業をさせる。鉛筆をもたせる。何かを書かせる。書くことと育てる。何かを言う。言うことと育てる。言うことは相手に対して、何かを伝えることなのです。相手の考えや気持ちを変える。というように相手に相手が変わることが自分を変えていることなのです。鉄棒を地平線に変えるつもりで僕が鉄棒にとびつく、ということは、僕が地平線と同じくらい大きな人間に変身するわけです。

人間というのは、ものをつくりだす、システムをつくる。そのこと、その行動したことが人間を大きく育てていく、そのことが生きていく力なのです。周りをかえる、周りに関わること即ち、自分を大きく変え、大きく育てることなのです。教師である皆さんが子供を育てる。そのことは単に子供を育てるに関わらず、それ自体、皆さんが自分をも育てていることになるのです。そのことが一回りも、二回りも人間として自分を大きくしているのです。鉄棒という詩は、まさにそのことを知ってもらいたいのです。

今、私は相関ということを書いてきましたが、「かぼちゃのつるが」という詩もそうです。おとという詩もそうです。相関ということを書いてきましたが、相関というものの見方。考え方。認識の方法と言いますが、わかりかたということですが、このものというものは、なんでもいいます。草でもいいし、宇宙と言うものでもいいし、虫でもなんでもいいます。そのどこをどうみるか。見たことをもとにどう考えるか。見方。考え方。つまりわかりかた。でも、何がわかりたいのか。ものごとの本質か、法則か。真実とか、意味とか。こういうことをわかるわかりかたを身につけていることが、生き方を身につける。学んだということになるのです。そのことをまんだことが生きる力をまんだことになるのです。

教師に一番の勤めは、子供たちにももの見方。考え方を教えるそれを育てることなのにそれが全部棚上げにされている。算数であれば、まずは、足し算・引き算をやる、それから割り算だの掛け算だのをおこなう。そうやって順序よくやって、さんすうの力を育てるわけです。それは、教科の特質としてですね。しかし、人間としてどのように生きてきたらいいの、どのように生きるべきかをどこで教えるのでしょうか。全く、これがない。認識の方法がいくつあるのかわからない。それは皆さんの責任ではありません。日本教育の中でまったくこのことが考えられていないわけですね。実際調べて見ますと、だいたい二十くらいあるのです。その二十くらいのなかの十くらいが小学校で教えることになるのです。これは、長年かけて私共は研究してきました。例えば、比べて見るという方法があります。比較ということですが、これは、一番使われる方法です。皆さんがものを買うときだって、見比べるというでしょう。生地とか、仕立てとか、製品とか。デザイン。値段。そういうものを見比べて、自分に都合、財布と(条件)相談して、買いますね。それは比べているわけですね。実際の生活の中でも私たちは、使っているわけです。生物、植物も調べるときまず、比べることからはじめます。種類などです。科学の第一歩はそこから始まるわけです。分類学のことから始まります。比べるというところを比べると、比べるという方法を比べて見ると、分類学のことから始まるわけです。比べるという方法は二つがあります。そういふところがもの見方。考え方といえます。比較・類別、相関というのがあります。先ほどかぼちゃのつるがで相関ということをやりました。詩がわかるということではなくて、生き方が分かる。相関というものの見方。考え方がわかることで自分の生き方がわかる。ということなのです。